



## 【図書館員によるアメリカ出張報告】

### SPARC Digital Repositories Meeting 2008と アメリカ国立医学図書館，ジョージ・メイソン大学， コロンビア大学訪問

#### 1. はじめに

機関リポジトリに関する調査・研究の一環として2008年11月17日(月)から始まる国際会議 SPARC Digital Repositories Meeting2008<sup>\*1)</sup>に出席しました。機関リポジトリとは、大学等の機関の構成員が生み出した研究成果を電子的な形態で保存し、Web上で公開することを目的としたシステムです。金沢大学でも「金沢大学学術情報リポジトリ KURA」の構築を行っています。

今回の出張の目的は、アメリカにおける機関リポジトリへの取組みの現状を調査すること、また大学図書館を訪問し、併せて学生サービスについても調査することでした。そのために、アメリカ国立医学図書館(National Library of Medicine: 以下 NLM)、ジョージ・メイソン大学、コロンビア大学を訪問しましたので、ここに簡単ではありますが報告します。

#### 2. SPARC Digital Repositories Meeting 2008

2日間にわたり、SPARCが主催するリポジトリに関する国際会議がポルチモアで開かれました。

1日目はリポジトリへの付加価値サービスに関して、ペンシルベニア大学の Shawn Martin 氏が機関リポジトリをバックボーンとした研究者個人のページを作るサービスについて発表し、またハワイ大学大学院の Jennifer Campbell-Meier 氏はリポジトリの普及のための広報活動の重要性についての発表をしました。

2日目は各大学でのリポジトリへの取組みが次々と紹介されました。両日とも多くの質疑応答が飛び交い、大変盛り上がりました。

1日目のセッションでは金沢大学情報部の内島秀樹情報企画課長の発表があり、デジタルリポジトリ連合(DRF)<sup>\*2)</sup>の活動やノーベル物理学賞の益川・小林論文を機関リポジトリへ搭載

した京都大学の事例など日本で行われているリポジトリ活動についての報告が行われました。

参加者の中にはこれからリポジトリを始めようと考えている大学の方もいっしょに、アメリカもリポジトリへの取組みを始めたばかりのところが多く、日本と同じようにまだ発展途上の段階にあるとの印象を受けました。

#### 3. アメリカ国立医学図書館(NLM)訪問

NLMはアメリカ国立衛生研究所(National Institutes of Health: 以下 NIH)に属する機関の1つです。NIHは生物・医学関係の研究助成金を出している政府機関で、2007年12月にはその助成金で行われた研究成果についてはNLMが運営しているPubMed Central<sup>\*3)</sup>というアーカイブへの登録を義務化するパブリックアクセス方針が法律化されました。この法律の対象は2008年4月7日以降に出版社に受理された査読済み論文です。今回の訪問では、まず施設を見学し、その後以下の点についてスライドを交えながら説明していただきました。

##### ・PubMed Central について

PubMed Centralの定義は「Digital Archive of life science journals」であり、フルテキストへのフリーなアクセスを実現しています。PubMed Centralへの登録には、出版社が参加を申し出てバックナンバーの登録の有無やembargo<sup>\*4)</sup>の期間など基本的な合意を交わす必要があります。

##### ・パブリックアクセス方針について

2005年5月に助成金で行われた研究については「voluntary」つまり任意での登録を促す方針が決まりましたが、あまり集まりませんでした。その後2007年1月にエルゼビア社<sup>\*5)</sup>から、7月にACS<sup>\*6)</sup>から著者版の提供を受け、2008年4月に登録が義務化されたこともあり、飛躍的に登録数が増加し、現在に至っています。

#### ・NLM が考えるオープンアクセスとパブリックアクセスの違い

オープンアクセスは使用に制約がなく自由であり、公表後すぐに利用可能なものに対して使用する言葉です。それに対しパブリックアクセスは一定の決まりの下での使用が原則となり、公表後すぐに使用できるわけではなく1年間の embargo が設けられます。

施設見学では、貴重書室で世界中の医学・自然科学の貴重図書を拝見させていただきました。こちらの本のいくつかは電子化されており、<http://archive.nlm.nih.gov/proj/ttp/intro.htm> から見るすることができます。

#### 4. ジョージ・メイソン大学 (George Mason University) 訪問

ジョージ・メイソン大学は1972年にバージニア大学から独立し州立大学となった比較的新しい大学です。こちらの大学の Fairfax キャンパスにある Johnson Center Library という図書館を見学し、ラーニング・コモンズ (学習するためにみんなが集う共通の場所)<sup>\*7)</sup>についてうかがってきました。

この図書館は Johnson Center という複合施設の中にあり、図書館のほかに映画館、フードコート、ブックストア、銀行などがあります。1階に入口がありますが、中央にある螺旋階段で直接2階や3階の図書館エリアへと行けるので、非常に開放的な図書館です。

Fairfax キャンパスにはこの図書館のほかに学内で一番大きい Fenwick Library があり、学生はそれぞれのメリット、デメリットを踏まえて図書館を選択することができると案内してくれた方はおっしゃっていました。

現在は資料の電子化が進み、パソコンでの情報入手が簡単となったため、図書館への来館者数は減少の傾向にあります。そのような中、大学図書館はラーニング・コモンズを設置するなどして利用者の増加を図っています。この Johnson Center Library は全体が大きなラーニング・コモンズとして学生に提供されているように感じました。このような複合施設型の図書館を提供することが純粋な図書館利用者の増加につながるかはわかりませんが、少なくとも学生

にとって図書館という存在が身近になることは間違いのないと思います。

#### 5. コロンビア大学 (Columbia University) 訪問

コロンビア大学は250年以上の歴史を持つ伝統ある大学です。ここではまず、Butler Library (写真) の見学をした後、リポジトリや学生サービスについてそれぞれ担当の方からお話をうかがいました。



Butler Library

コロンビア大学のリポジトリ「Academic Commons」<sup>\*8)</sup>は2005年より運営が開始され、2008年12月現在約10,600件のレコードが登録されています。学内の教員、学生、スタッフによる研究成果を安全に長期間保管し、それらをオンライン上で発見し使用出来るようにすることにより、研究成果へのアクセスを増加させることを目標としています。

機関リポジトリの活動においては、研究成果の主な生産者である教員への広報活動が重要となってきます。金沢大学では図書館職員自ら教員への説明を行っていますが、コロンビア大学では教員と直接コンタクトを取り合っている Selector (各分野における書誌の専門家) などへの広報活動を主にしています。Selector にリポジトリを知ってもらい、Selector を通して教員へ広報しているようです。

案内をしてくださった方のお話の中で、蔵書スペースの問題についてもうかがうことができました。コロンビア大学でも蔵書スペースの問題は深刻となっていて、現在古い図書や利用頻度の低い図書はオフサイト (Off-site) と呼ばれる場所へと移されています。

オフサイトとはプリンストン大学、ニューヨーク公共図書館と共同で運営している図書の保

管庫で、プリンストン大学の敷地にあるため図書を取り寄せるのに2日はかかってしまい、学生にとっては大変不便であるとのことでした。

また、コロンビア大学図書館でもジョージ・メイソン大学図書館でもコース・リザーブというサービスが行われていました。

コース・リザーブとは教員が授業で使用する図書や参考図書などを選定し、図書館がそれらを複数購入し学生に提供するサービスです。日本でもこのサービスを提供している大学図書館はいくつかあります。アメリカでは比較的メジャーなサービスで、コロンビア大学ではこのコース・リザーブの図書の利用が大変多いそうです。

## 6. 終わりに

今回 SPARC Digital Repositories Meeting 2008 への参加や大学図書館等を訪問したことにより、アメリカでのリポジトリ活動の現状を知ることができました。

多くのアメリカの大学はリポジトリに本格的に取り組み始めたばかりであり、抱えている問題点や今後取り組む課題などは日本と共通しているものが多くあります。しかしパブリックアクセス方針の制定やリポジトリ専任の職員を置くなど、環境の整備に関してはアメリカのほうが一歩先を行っていると思いました。また、色々な方の話を聞くにつれ、教員の方が論文を登録したいと思う魅力的なりポジトリの環境作りとそれをアピールする広報活動の重要性を改めて感じました。今回得た知識をこれからの KURA の運用に是非活用していきたいと考えています。

最後になりますが、今回の出張にご協力いただいた訪問先機関の方々、日本から一緒に参加した他大学の方々、金沢大学附属図書館の方々、そして旅先で出会い親切にしてくださった方々、すべての方にこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

\*1) SPARC (Scholarly Publishing and Academic Resources Coalition) とは大手商業出版社の雑誌価格高騰に歯止めをかけるため、学術研究成果のオープンアクセスなど非営利的な学術情報流通の実現を目的として1998年に設立された組織。SPARC Digital Repositories Meeting 2008 に関しては <http://www.arl.org/sparc/meetings/ir08/> を参照のこと。

\*2) デジタルリポジトリ連合(Digital Repository Federation, DRF) とは機関リポジトリに関する情報を機関間で相互に交換・共有するために北海道大学、千葉大学、金沢大学が立ち上げた組織。詳しくは <http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/> を参照のこと。

\*3) PubMed Central とは NLM が主催するライフサイエンス分野の電子ジャーナル・アーカイブデータベースで、無料でフルテキストが利用可能だが、発行後1年前後利用できないものが含まれている。  
<http://www.pubmedcentral.nih.gov/>

\*4) 出版した論文を Web 上で無料公開するまでの猶予期間。

\*5) エルゼビア社 (Elsevier) は、オランダに本社がある大手学術出版社。

\*6) ACS (American Chemical Society) は、アメリカ化学協会。

\*7) ラーニング・コモンズとは、「学習するためにみんなが集う共通の場所」で、パソコン等の学習設備が整っており、個人の学習やグループでの学習、ディスカッションなどを行いやすい施設。大学図書館に設置されることが多く、資料調査で行き詰ったときのための利用相談やレポートの作成支援などが行われることもある。

\*8) 「Academic Commons」  
<http://app.cul.columbia.edu:8080/ac/>

(情報企画課コンテンツ第一係 川井奏美)